事例８は事例５の続きでAとBが消化と体の関係性について話している(02,03)。06のAの発話で会話は一度終結する。その後、Bが「話題を止めるつっこみか」(11)と会話を続けようとしたが、また会話は止まってしまった。自分の発話の失態に気づいたAが「や:ばいな」(13)などと発話するも、間ができてしまう。そのタイミングを見計らったCが「(I_はい)」(15)と視線と手によってAを次話者に選び、そこから会話が仕切り直される。

(事例８) 0232:1.46.794-2.06.984
01 B: (W_[ワアン|わかん)ない
02 栄養の吸収率が違うんじゃない]の
03 A: [(T_カラ-|体)(.)体には悪い
かも知らんけど]
04 C: (I_あー[:] [ )]
05 B: [(I_うん)]
06 A: [なん]で
(2.728)
07 B: すごい[(.) []な][<笑>]
08 A: [<笑>]
09 C: [<][笑 [] >]
10 A: [<][笑
>]
11 B: [話題を止める[つっこみか <笑]>]
12 C: [<笑>
]
(1.193)
13 A: や:ばいな
14 こりゃ
(1.806)
→15 C: (I_はい)
16 A: (I_はい)
17 <[笑>]
18 B: [(I_は:い)[じゃねえよ]<笑]>
19 C: [<笑>]
20 A: (D_ン)な[がれたか 今[<笑>]
21 C: [今同時に [(W_ジガッ|違っ)た 今]<笑>
22 B: [<笑>]

このようなケースはこの１例である。

4. 議論

ほとんどのケースで自ら率先して特殊なやり方でターンを取得していることが分かる。「横槍を入れる」ということは、他の二人が話している内容と水準の異なるメタ的な発話をすることであり、今までとは異なる視点を提供するものである。「前の発話を詳細化する」ということは、先行する発話に出てきた言葉を用いてより詳しい内容を話すよう促すもので修復に近くなる。「知識的権限に基づく発話」ということは、他の二人より自身の方が知識があること、ひいては自分の方に話す権限があることを示すものである。「独り言をいう」ということは、他の二人のターンとは関係なく発話を開始できる。「誰にともなく発話する」ということは、他の二人が話している最中や合間に、誰に向かってでもなく、自分の意見や感想を差し挟むものであり、無責任な発話のため、それまでの会話を止めてしまったり、場の空気を変えてしまうこともある。「セカンドストーリーを語る」には、他の二人が話している体験と類似した体験をした場合でないとできない発話であり、自身の体験を披露するという形で「知識的権限に基づく発話」に近い。

「宛先を得て話す」というやり方は最も自然で話者交替規則に基づくものである。二者間バイアスのうちの一人が宛先に選んでくれたことで次話者として選択されて話していることになる。この８分類の中で唯一自らの率先行動ではないものとも言える。

「司会者的な発話をする」は他の二人の会話が一段落した時に出現し、次の会話の進行を司るものである。そもそも、一端直前のやりとりが終了していた箇所といえる。

以上のような8つが二者間バイアスから離脱するために使われる方略である。「宛先を得て話す」を除く７つは自ら率先して特殊なやり方でターンを取得していると言える。このような特殊なやり方でしか割って入れないということは、やはりそもそも二者間バイアスが参与者達の間に存在していたことを裏付ける。

参考文献

[１] 榎本美香・伝康晴.(2006).3人会話における発話交換構成員の推移の分析.社会言語科学学会第17回大会論文集(pp.12-15).

[２] Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson. “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation.” Language,50(4) (1977) , 696-735; (H.サックス/E.A.シェグロフ/G.ジェファソン/西坂仰 訳/S.サフト 翻訳協力. (2010).『会話分析基本論集「順番交替と修復の組織」』世界思想社

[３] 高梨克也. (2016). 「基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法」ナカニシヤ出版